

## 近世日本の医薬界における神農画賛流行の背景

小曾戸 洋

江戸時代、わが国医薬界においておびただしい数の神農画像が製作され、賛なども付されて世に流布したことは、多くの遺品が証明するところである。むしろそれは中国の影響を蒙ったものであるが、逆に当の中国では清朝以降、日本ほどにはそういった現象は顕著にみられない。以下、近世日本の医薬界における神農画賛流行の背景について史的考察を試み、あわせて作例を紹介する。

中国で神農が医薬祖神としての地位が与えられたのは、唐の司馬貞による『史記』三皇本紀の記載からとされる。平安時代まで、日本へは神農の名を冠する医薬書が渡米してはいしたが、神農そのものを祭り崇拜したらしい痕跡は医薬書中には見い出せない。おそらく平安時代まで和・丹など宮廷医家で神農を祭祀する風潮はなかったのではないかと思われる。

日本の医家に神農の存在を意識せしめるのに一役かったのは、鎌倉幕府成立前後に新渡来した宋版『証類本草』の諸序ではなかったらうか。『証類』の序例は本草の規範としてのちに単行の刊本となり、日本に流布した。また『太平御覧』『医説』など、神農の伝を付した中国出版物（宋刊本）の渡来も神農の名を印象づけるに役立ったであろう。

これらによって鎌倉中期、神農は日本の医界でも医薬の祖として脚光を浴びるようになる。『医談抄』（二二八四頃）には本草の祖として明記され、またこの頃神農の画像も出現する。現存最古の神農画は『馬医草紙』（二二六七）であろうか（ただしその神農の扱いは異質である）。ほかにいくつか鎌倉時代の神農画が現存するらしい。しかし、日本中世に神農崇拜の風習を根づかせたのは、何といても鎌倉から室町を通じて宋・明の文化を受容した禅僧（五山僧）の活動に依る。

ところで、中国医界で神農を医薬祖神として大きくクロウズアップさせたのは王履の『医経溯洄集』（一三六七頃成であった。巻頭に「神農嘗百草論」を置く。この書は『東垣十書』（十五世紀初）に収録されて中・朝・日に広く流布した。さらに神農＝医薬神のイメージを日本医家に植え付けたのは熊宗立である。十五世紀半ば福建建陽で出版事業を営み儒医でもあった熊宗立は、すこぶる多くの医書を編刊した（『東垣十書』も含む。これらは地の利もあって日本に大量に舶載され、室町から江戸初の日本医学の決定的基盤となった。近世初期の日本医学は熊氏所刊本抜きには語れない。熊宗立の『医書大全』は日本で最初に印刷された医書としても有名だが、第一冊『医学源流』の首には神農の徳が謳ってある。かつまた宗立の編刊した『歴代名医図賛』（一四七六序刊）には神農の絵と賛があり、これが日本における神農画賛流行の端緒となったと考えられる（のちに道三や吉田宗恂も引用）。なお、同時代に渡明した経験をもつ雪舟の作とされる神農画が数点伝存し、

それらは晩年の十六世紀初頭作というが、真偽のほどは不詳。それから数十年後、日本の禅僧や医家の知識階級層では、神農画賛の製作・贈答が盛行するようになった。その情況は当時の名僧月舟寿桂（一四六〇—一五三三）の遺した諸々の神農画賛史料からうかがえる。また月舟は『史記』扁倉伝注で神農を説くに『医經溯源集』と『医学源流』を引用している。伝雪舟筆も含め当時の神農図案には『歴代君臣圖像』（一四八七・一五二五刊）など一連の中国明刊聖人図録に拠ると思われるものも多い。

安土桃山から江戸初にかけてついにこの風習は日本の医葉関係者の間に定着し、以後幕末に至る。曲直瀬道三が熊宗立賛を引用した神農画賛（一五八八）をはじめ、玄朔・玄淵・玄著など歴代道三の賛になる神農画は数多く伝存する。加えて本口演では、王韃南・沢庵宗彭・徳川綱吉・山脇玄修・半井成明・山脇東洋・亀田鵬斎・多紀元堅・谷文晁・久志本常珍・田能村直入など歴代名士の画賛になる作例を供覧に付す。

（平成六年二月例会）

（追記）本発表の後、演者はさらに資料を探求し考察を進めた結果、右では言及しえなかつたいくつかの新知見を得た。その成果はすでに論文にまとめ、来年初に刊行予定の次の書に登載されることになっているので、詳細はそれによらぬ。斯文会刊『神農五千年』所収拙稿「神農と医葉」

（第二節「医葉文献にみる神農画賛の歴史」）。

## 紹介

吉岡郁夫・長谷部学著

『ミルンの日本人種論—アイヌとコロボクグルー—』

日本人の起源に関する研究は、明治初年のお雇い外国人教師等によって始められた。中でも人体計測による資料に基づいて近代人類学を創始したベルツの功績は大きい。ベルツ以前の研究者としてモース、ハイリッヒ・シーボルト、ジョン・ミルンの名を忘れることはできない。ベルツがこれらの人々から影響を受けたであろうことは夙に著者の指摘するところである。

ミルン、モース、シーボルト等は考古学的・民俗学的資料を基として研究を進めたが、中でもモースによる大森貝塚の発見は有名で、ミルンの名はその影に隠れて人々にあまり知られていない。著者はミルンの足跡を詳しく調査して、その業績がモースに劣らぬものであることを確認し、この方面におけるミルンの業績が再評価されることを願っている。

本書の構成は二部に分れ、第一部ではミルンとその時代の外国人教師等による研究業績が紹介され、それに著者の論評が加えられている。第二部ではミルンの論文五編が翻訳掲載されている。

第一部。明治九年、工学寮の地震学・鉱山学の教師とし